ご挨拶

『鏡の国のアリス』は『不思議の国のアリス』の続編として1871年に出版されました。今年でちょうど出版から150年を迎え、記念の年となります。

『不思議の国』にも『鏡の国』にも登場する唄が、マザーグースです。日本でも「ロンドン橋」や「クックロビンの唄」をはじめ、わらべ唄として知られます。マザーグースはイギリス絵本史において大きな題材となりました。そこに、『アリス』の作者であるルイス・キャロルの創作のノンセンスが加わり、イギリス絵本史は大きな転換期を迎えました。

『不思議の国のアリス』に出てくるハートの女王はまさにマザーグースの一つ「ハートのクイーン」からとられたものです。『鏡の国のアリス』に出てくるマザーグースとしては「トゥイードルダムとトゥイードルディー」「ハンプティ・ダンプティ」があります。その他にも「ジャバーウォッキーの唄」「セイウチと大工」など、キャロルによるノンセンスな詩が登場します。

『鏡の国のアリス』にはチェスのルールに沿って進むというはっきりとした舞台が存在し、アリスと登場人物たちとの一見不条理な会話も、どこか一本の線でつながっているようなストーリーがあります。特に第6章「ハンプティ・ダンプティ」での掛け合いは、核心をつくような哲学的対話として、本作の有名な場面です。また、第8章に登場する白の騎士は、キャロル自身を反映していると言われ、作家としてのキャロルの感情が滲んでいます。

「ノンセンス」という言葉は、日常では「無意味」という否定的な意味合いで使われますが、作品においては違います。常識やその時代の価値観、固定概念などをくつがえすような表現であり、知的な言葉遊びを指します。『アリス』は、ファンタジーが生まれていない19世紀に登場した、イギリス絵本史を大きく動かす作品だったのです。

本展では、『鏡の国のアリス』を中心に、マザーグースのご紹介、そしてノンセンスの魅力を紐解いていきます。

最後に、本展にて展示いたします作品をお貸しくださったひらいたかこ先生、名誉顧問・吉田新一先生、顧問・川西芙沙先生、藤本朝巳先生、本展にご協力くださった皆さまに、深く感謝申し上げます。

マザーグース
～子どもの楽しみを象徴するノンセンス～

Randolph Caldecott画『6ペンスの唄をうたおう Sing a Song for Sixpence』（1880年刊）

『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』には、マザーグースの詩が出てきます。『アリス』の魅力と言えばあの独特で理不尽な会話にありますが、そこにはマザーグースというイギリス英語独特の共通認識が潜んでいるのです。

マザーグースはイギリス発祥の伝承童謡とされていますが、フランスのシャルル・ペローの童話集に端を発するものです。シャルル・ペロー『昔の物語』の副題「わたしのお母さんガチョウのおはなし」を英語で直訳したものが、最初の「マザーグース」という言葉になりました。

マザーグースの魅力は未だに解明尽くされていない部分が多くありますが、その言葉の語感を頼りに、本来ならつながるはずのない言葉がつながることで、非日常性や滑稽さが生まれ、ノンセンスな面白さとなるのです。

教訓が中心だった子どもの本に、こうした非日常でノンセンスな面白さが加わったのです。いわば、マザーグースは子供の楽しみの象徴ともいえます。

Sample
Sample